

宗 像

武丸原

福岡県宗像市大字武丸字原所在遺跡の調査

宗像市文化財調査報告書 第17集

1988

宗像市教育委員会

MUNAKATA

TAKE

MARU

HARU

武丸原

福岡県宗像市大字武丸字原所在遺跡の調査

宗像市文化財調査報告書 第17集



1988

宗像市教育委員会

序 文

武丸原遺跡は宗像市東部の、吉武地区県営は塲整備に伴い、1987年に発掘調査を実施した中世の遺跡です。

市域では最初の中世火葬所の調査であり、特に、宗像氏と大内氏の関係にとって貴重な手がかりとなるものです。

本書が広く文化財保護および学術研究に貢献することを念願いたしますとともに、発掘調査全般にわたってご協力いただいた多くの方々に心から感謝の意を表する次第であります。

昭和 63 年 3 月 31 日

宗像市教育委員会

教育長 竹 原 瑛

例 言

1. 本書は1987年度に国・県の補助を受けて実施した宗像市内の文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査は宗像市教育委員会が事業主体となって行った。
3. 遺跡から出土した火葬骨については九州大学医学部の田中良之氏に鑑定をお願いした。
4. 本書に使用した図の作成は原俊一、安部裕久、藤井隆晴があたり、製図は徳永映子が行った。
5. 本書使用の写真は現地を安部、遺物写真は原があたった。
6. 本書の執筆・編集は原が行った。
7. 本書の題字は城月かよ子による。

本文目次

	本文頁
I はじめに	1
II 位置と環境	2
III 発掘調査の記録	5
IV おわりに	9

挿図目次

	本文頁
第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000)	3
第2図 調査区図 (1/2500)	4
第3図 地形測量図 (1/400)	5
第4図 1・2号竪穴実測図 (1/40)	6
第5図 1号竪穴実測図 (1/20)	7
第6図 1号竪穴出土土器実測図 (1/3)	8

図版目次

図版1 遺跡周辺の航空写真 (1/12500)
図版2 調査前遠景 (西から)、調査区全景 (南から)
図版3 1・2号竪穴全景 (南から)、1号竪穴上層遺物 (東から) 1号竪穴下層遺物 (北から)
図版4 1号竪穴出土遺物

I はじめに

宗像市吉武地区の県営は場整備に伴う文化財調査は、昭和62年6月の麦刈り後に着手したが、石井地区については重機による試掘では遺構の保存状態が悪く、発掘調査を断念した。同年8月になって福岡農林事務所から、石井地区の事業範囲が拡大されたとの連絡が入り、吉武土地改良区、福岡農林事務所を加えた協議で、試掘により調査範囲を限定し、他事業の終了をまって当該地の発掘調査に着手した。

発掘調査は昭和62年10月22日から重機を入れて遺構の範囲と調査地の表土を除去した。

幸いにして調査地は狭い範囲となつたために昭和63年11月7日まで現地調査を終えることができた。

引き続き整理作業に入り、昭和63年3月31日をもつて事業を完了した。

なお、発掘調査の着手前の手続きにおいて、大字武丸字町添312番地所在の古墳群を調査対象地として、『武丸町添遺跡』の名称で発掘届、発掘調査の届けをしていたが、当地が事業直前になって地元の都合では場整備の対象から除外されたために、本年度中の調査は実施できなかつた。

発掘調査の組織は次のとおりである。

組織

総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	竹原 瑛
		教 育 部 長	白木 国明
		社会教育課長	吉田 繁利
		社会教育係長	井上 弘
庶務・会計		主 事	大賀由美子
発 堀 調 査		主 事	原 俊一
		技 師	安部 裕久

発 堀 調 査 昭和62年10月22日～昭和63年11月7日

発掘調査面積 800 m²

概 要 積穴2、柱穴、包含層

II 位置と環境

宗像市の東部を占める吉武地区は、考古学的にはほとんど知られていなかった。

文化財資料としては大字吉留の八所神社の県指定彫刻である『木造十一面觀音立像』があり、県指定の天然記念物として大字吉留の『吉武の楓』、大字吉留の『平山天満宮の大クス』が知られているぐらいである。

考古学的に明らかになってきたのは吉武地区のは場整備に伴う発掘調査によるものである。以下、各遺跡の概要を述べておきたい。

武丸大上げ遺跡は奈良時代における古代の官道である『鳩門』、『津日』駅の中間に所在する遺跡ではないかと言われており、発掘調査では大形掘立柱建物2棟、小形の掘立柱建物1棟、竪穴住居跡2棟、石組造構1基を検出し、遺構上面の包含層中に多量の瓦が出土している。

武丸高田遺跡は標高30mの丘陵上にある集落遺跡である。調査面積は狭かったが5～6世紀の屋外排水溝を付設する方形の住居跡と掘立柱建物跡、さらに多くの小竪穴を発掘した。特に3・4号住居跡の屋内鍛冶炉は梢円形の掘りこみをもつもので6世紀後半に考えられる。

武丸小伏遺跡は標高40mの、東側急斜面を背にした小集落遺跡である。方形の竪穴住居跡と多数の柱穴を検出した。このうちの2号住居跡は壁際にカマドを設けており、4本の主柱穴を持つ。また、住居の隅から屋外排水溝をつくっている。カマドの時期は6世紀後半と考えられる。

吉留下惣原遺跡は標高30mの丘陵上にある集落遺跡である。A区からは縄文時代晩期の包含層を検出し、刻目突帯文以前の土器群を知り得た。今後の縄文時代研究の発端となろう。B区では6～7世紀にかけての倉庫群を検出した。

武丸皆真庵遺跡は標高50mの丘陵上に分布する古墳を主体とする遺跡である。5基の古墳は6世紀の中頃から後半にかけて営まれ、その後、中近世に1基づつ土塚墓がつくられている。このうちの2号墳は当地方特有の深い墓壙、濠道を持たない主体部構造を持っている。

以上に概観したように近年の、特には場整備に伴う緊急調査によって、古代の吉武が浮かびあがりつつある。

当遺跡は吉武地区でも釣川の南側に位置し、南部の郡境から派生する丘陵の付根にあたり標高80mの西側緩斜面に占地する。同一丘陵の北方には、江戸時代に名を知られた『孝聖武丸正助』の墓がある。

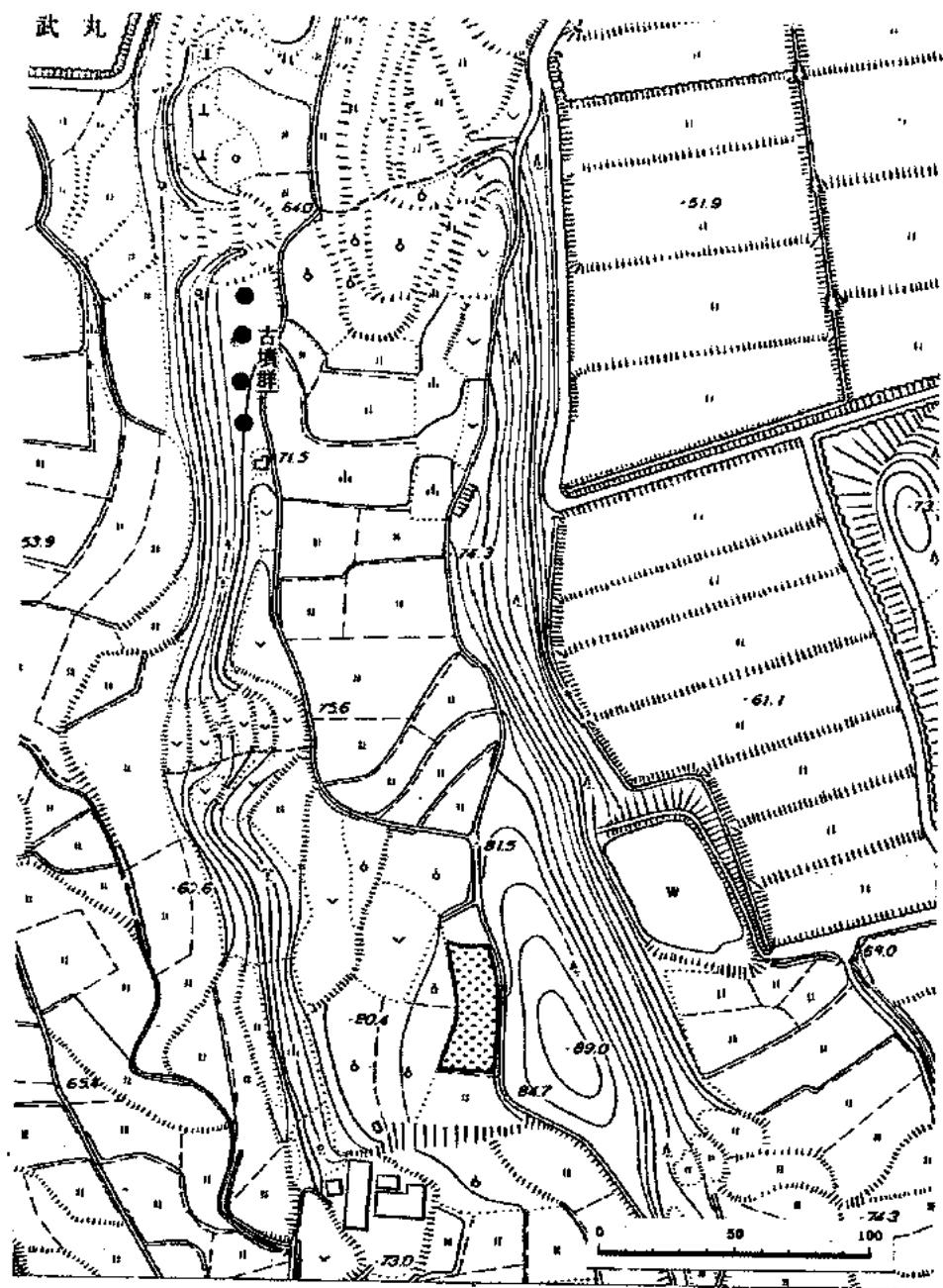
武丸原遺跡



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1. 武丸皆真庵遺跡 | 2. 武丸大上り遺跡 | 3. 武丸高田遺跡 |
| 4. 武丸小伏遺跡 | 5. 名残遺跡群 | 6. 吉留下惣原遺跡 |
| 7. 石丸遺跡 | 8. 陵巖寺宇土遺跡 | 9. 石丸原遺跡 |
| 10. 武丸原遺跡 | | |

武丸原遺跡



III 発掘調査の記録

調査対象地は水田であるため、最初に重機による表土（耕作土）を除去する作業から始めた。表土下はすぐに地山となり、この面で遺構を確認するに至った。検出した遺構は竪穴2基と柱穴状の竪穴、さらに北側に包含層と思われる黒色の堆積土があったが、遺物は何も検出できなかった。

調査地の東側は林となっており、この林の中を尾根線として、西側へ緩く傾斜面をつくる。調査地および周辺は全て水田化されているが、近年の減反政策により大半の水田は休耕状態となっている。

調査区は南北に長い水田に添って設定した。標高は82~83mである。

調査区の南半で遺構を検出した。

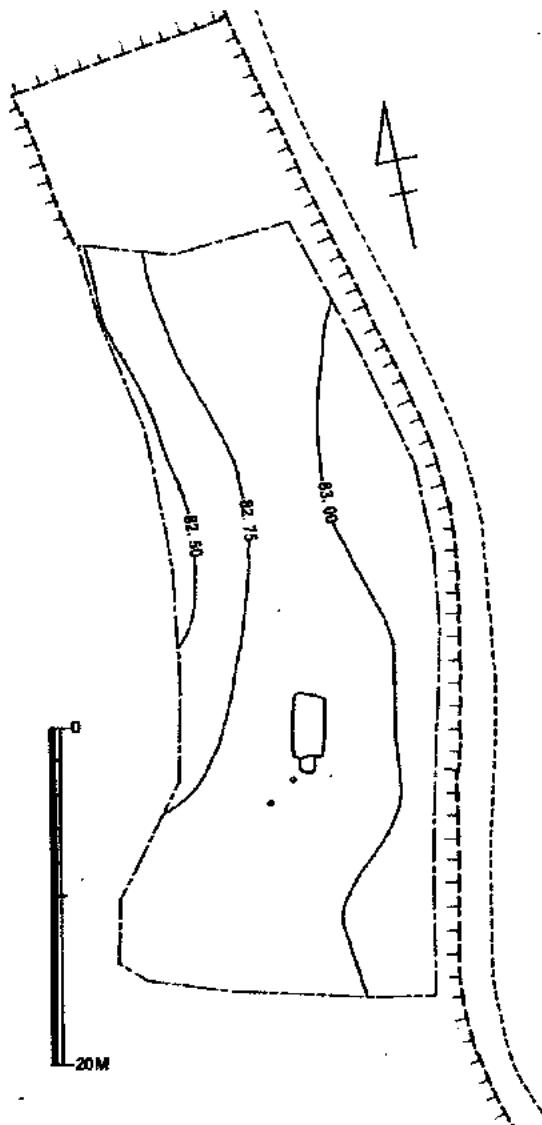
1. 1号竪穴

この竪穴は2号竪穴を切り込んでつくられている。

遺構

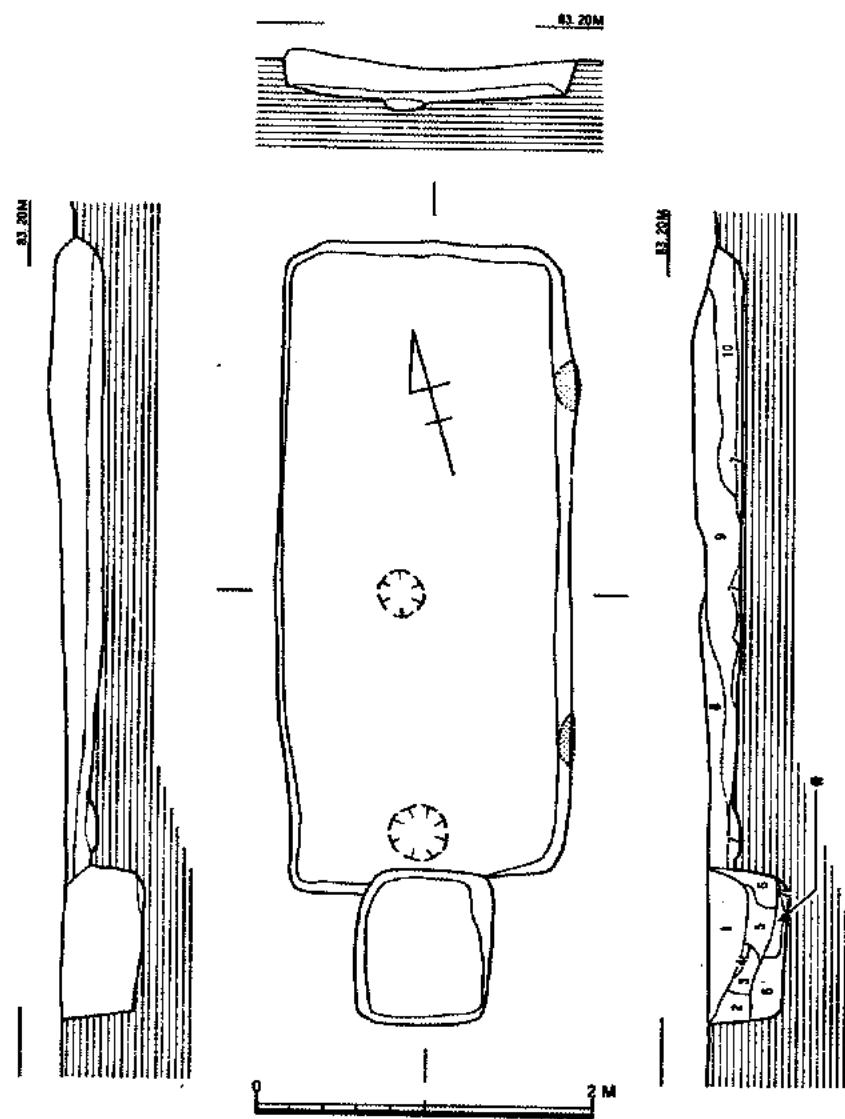
遺構内土層は最下部に炭の堆積があり、その上に焼土塊が認められ、この焼土塊に挟まれるように焼骨の堆積がある。特に壁際では焼土塊が多く認められ、壁面の崩落を示すものであろうか。

床面および、床上10cmほどまでは火を受けた痕跡は認められない。それ以上の壁面は赤く焼けてしまっている。赤変の認められない部分は崩落後の壁と考えられる。



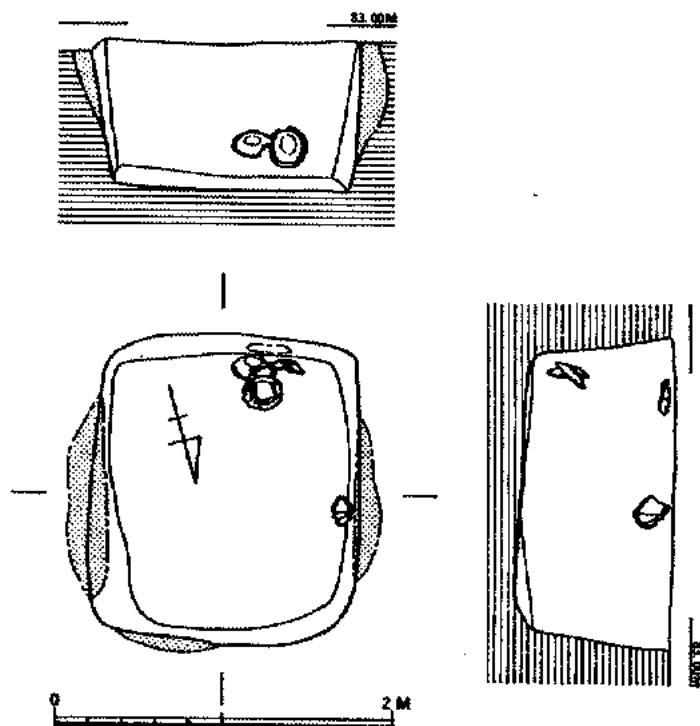
第3図 地形測量図 (1/400)

武九原遺跡



第4図 1・2号竖穴実測図 (1/40)

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1. 暗茶白色粘質土 (褐色焼土ブロック含む) | 2. 暗黄白色粘質土 (灰白色土がまじる) |
| 3. 暗黄白色粘質土 (地山ブロック) | 4. 暗黄白色粘質土 (3よりよごれがある) |
| 5. 暗黄茶色粘質土 | 6. 焼土塊 (焼骨を含む) |
| 7. 廃 | 8. 茶黒色粘質土 |
| 9. 暗茶色粘質土 (炭を多量含む) | 10. 茶黄色粘質土 |



第5図 1号竪穴実測図 (1/20)

竪穴は南北95cm、東西80cmの隅丸方形のプランを呈する。竪穴の4周ともほぼ垂直に立ち上り、最も深いところで45cmを測る。

遺物 (第4・5図)

遺構内に落ち込んで2群の土師器の杯が出土した。1～3は埋土の上層から出土した。口径10.9～11.6cm、器高2.7cm、底径6.6～7.0cmを測る。いずれの底部も回転糸切りで、内外とも横なでによる凹凸を強く残している。口端部は丸くおさめている。

4～6は床面に近い層から出土した1群である。口径11.8～11.9cm、器高2.5cm、底径4.4～4.8cmを測る。いずれの底部も回転糸切りで、内外面、底部両面とも連続する横なで調整による凹凸を強く残しており、口端部は上方に引き出されるようにしておさめている。

1～3は胎土に砂粒を多く含み、赤褐色に焼かれているのに対し、4～6は胎土は精選されており、器壁も薄く、黄灰色に焼かれているという違いが見られる。

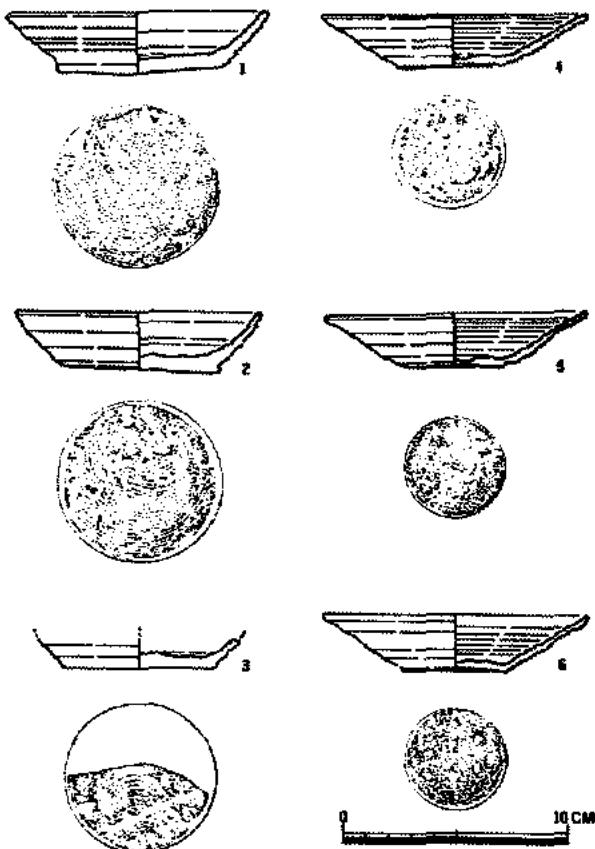
2. 2号竪穴

1号竪穴の北側に位置して、南壁の一部を1号竪穴に切らされている。

遺構

土層は床面全体に薄く、炭層が認められた。炭層中に焼骨を検出することはできなかった。

平面形は南北に長い偶丸長方形を呈する。南北390cm、東西180cmを測る。最も深いところで30cmである。4壁ともほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦である。床面中央の南によったところで、直径30cmほどの浅いすり鉢状の掘り込みが見られる。壁面の東側で2ヶ所に焼けた痕跡が認められる。



第6図 1号竪穴出土土器実測図 (1/3)

IV おわりに

わずかに2基の竪穴の調査であったが、今後の中世史解明の上で貴重な成果をあげることができた。

1・2号竪穴とも内部に炭層を有することから、火葬にかかわる遺構と考えられるが、2号竪穴は炭層と壁が焼けていたという事実からは火葬墓、火葬所として確認するには資料不足といえる。各地の調査例からしても長さ3.9mというのは長大であり、1人の火葬のためには大きすぎるといえる。仮に火葬を考えるとすれば、複数の遺体を火葬に付したものと考えねばならないが、中世火葬がほぼ1基で1人の火葬例がほとんどであるところからすると無理があるといえる。類例を待つほかはない。

1号竪穴については、焼骨、炭と焼土、焼壁の検出から火葬所として位置づけができるであろう。火葬墓とするためには焼骨の絶対量が少ないことが上げられる。また上部施設についても、現況が水田ということもあり、現段階は何も言えない。少なくとも、ここで火葬をして、集落の近くで新たに墓を設けて埋葬したものと考えられ、この地では焼骨の一部が残され、火葬後に土器などを供獻して祭ったものであろう。

1号竪穴出土の土器のうち黄灰色を呈する薄手の土器群は、近年の中世遺跡の調査で類例が増えつつある。大宰府史跡の発掘調査では杯bとして分類されており、14世紀中頃から16世紀の前半の範囲で出現することが知られている。

大宰府史跡70次調査のSD1805は文亀元年(1501年)の木簡を出土しており、伴出する杯bは1号竪穴出土の土器に法量が最も近い数値を示しており、1号竪穴の時期をおよそ16世紀前半代に考えられる。

杯bの土器について注目すべきことは、この種の土器が報文によるもので実見していないが山口県山口市の大内氏館跡から数多く出土しているということである。14~16世紀は大内氏による筑前国支配の真只中にある時期である(註1)

特に宗像家(大宮司)は、大内氏の筑前進出の初期から関わりをもっており(註2)、このような両者の関係から武丸原遺跡における火葬を導き出すことも可能ではないかと考えられるが、いずれにしても、今後の調査例の増加を待つほかはない(註3)

註

1. 佐伯弘次 1978 大内氏の筑前国支配 九州中世史研究 第1輯
大内義弘の時期に、宗像氏が合力していたと指摘されている。
2. 山口市教育委員会 1987 大内氏館跡Ⅶ 山口市埋蔵文化財調査報告 第23集

武丸原遺跡

大内義弘の時期には朝鮮貿易の道を開いており、この時期から、筑前国との関わりが強くなったものと考えられる。

3. 狩川真一 1987 橋板遺跡 太宰府市の文化財 第11集

太宰府史跡から出土する杯もは、およそ14世紀中頃から16世紀前半頃に考えられている。このことは大内氏義弘の筑前進出から大内義隆の自刀による大内氏の滅亡の時期によく対比しており、今後、杯もが大内氏の筑前国支配を示す、重要な遺物となる可能性がある。

図 版

武九原遺跡

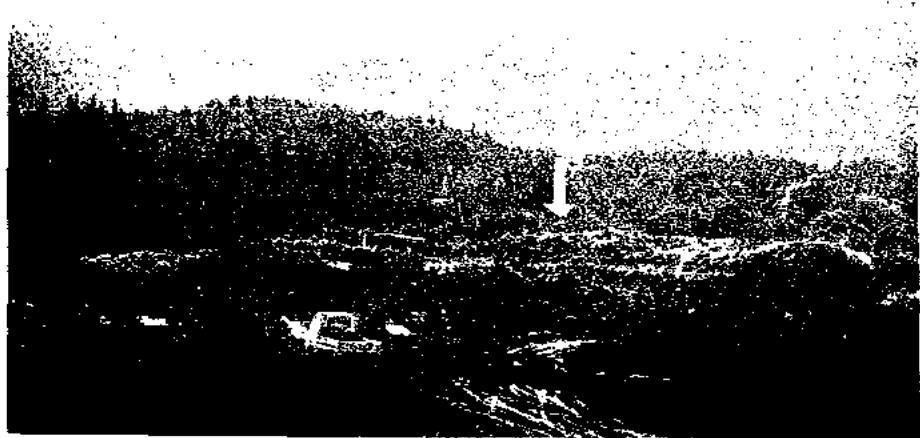
図版1



遺跡周辺の航空写真 (1/12500)

武九原遺跡

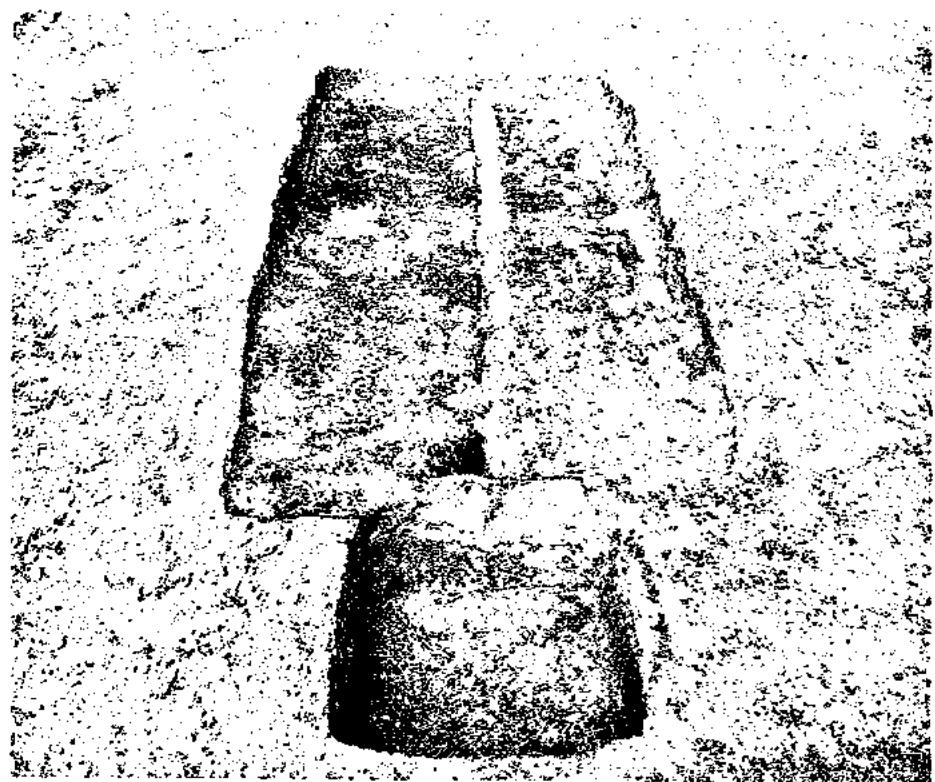
図版2



調査前遠景（西から）



調査区全景（南から）



1・2号竪穴全景（南から）

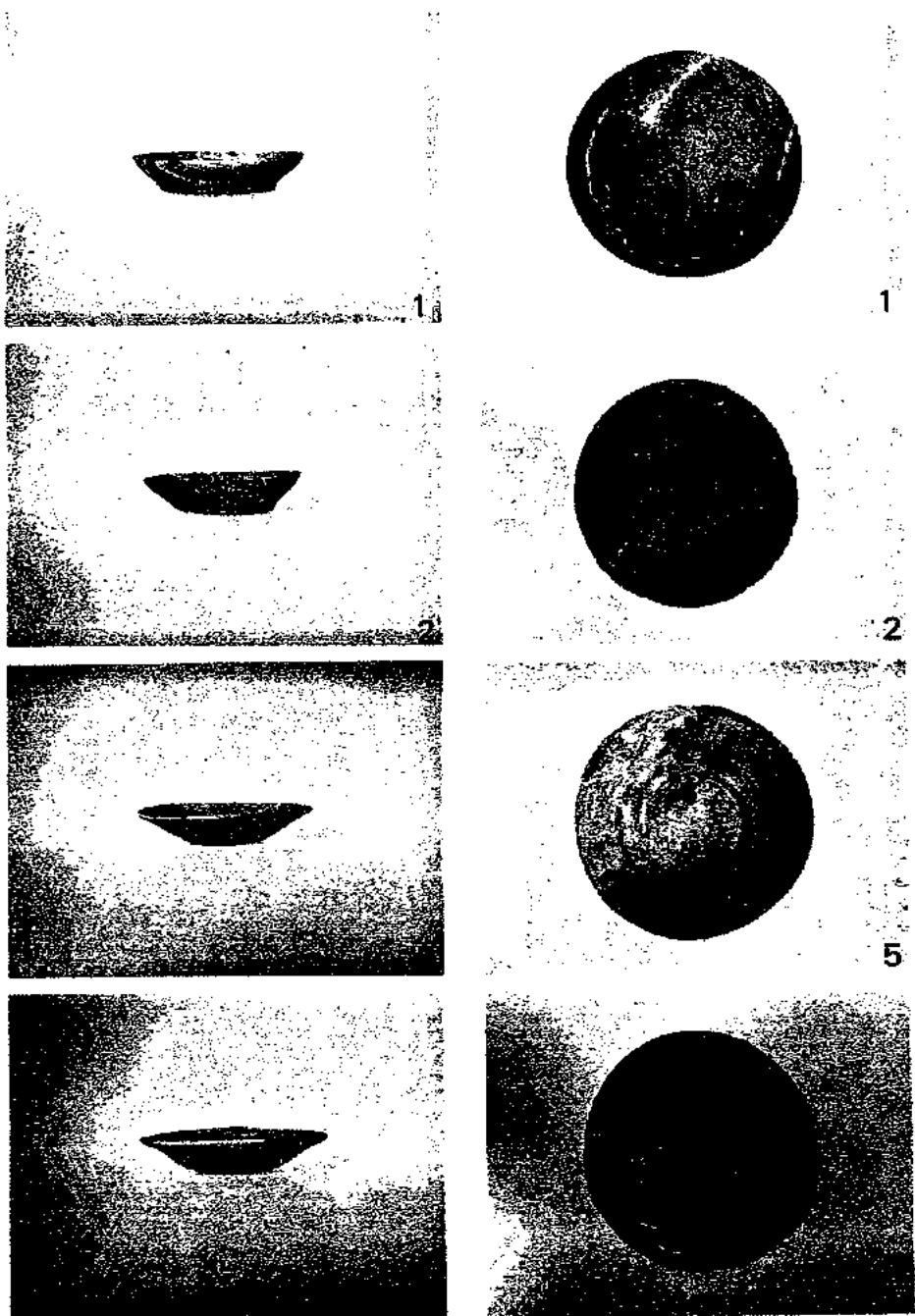


1号竪穴上層遺物（東から）



1号竪穴下層遺物（北から）

图版 1



1号竖穴出土遗物

宗 像

武 丸 原

宗像市文化財調査報告書

第 17 集

1988年 3 月 31 日

発行 宗像市教育委員会
福岡県宗像市大字東郷995番地

印刷 釜瀬印刷
福岡県宗像市福元